

メットリンゲン

—悪魔憑きと「神の国」思想をめぐる病跡学的考察—

大宮司 信

メットリンゲン —悪魔憑きと「神の国」思想をめぐる病跡学的考察—

大宮司 信*

1. 始めに：内容・目的・資料

本論考は今から170年ほど前にメットリンゲンというドイツの片田舎でゴットリーベン・デイトゥス（以下：ゴットリーベン）という若い女性に起こった悪魔憑きとその治癒という精神病理学的な事象が、「神の国」思想という神学思想に与えた影響を病跡学の立場から考察することである。資料とするのはこの出来事に関する詳細な報告書と、それに続く精神医学・神学からの意見を収載した諸文献である。

精神医学と深い関わりをもつ古都ハイデルベルグを流れるネッカー川をさかのぼることおよそ120km、ドイツ南部の中都市シュツツガルトの奥にバート・リーベンツェルという村がある。ここからさらに山を越え奥にわけ入った寒村がメットリンゲンである。当時も今も牧草と農地が広がる中に民家が点在し、中央に教会がある、ドイツのどこにでもみられるありふれた田舎の村である。

この悪魔憑きが起こったころのメットリンゲンは人口500名ほどの小さい村であった。もう一人の主人公であるヨハン・クリストフ・ブルームハルト（以下：ブルームハルト）という若い牧師が着任したメットリンゲン教会

は、これもまたどこにでもある小さいなただずまいだが、16世紀から続く歴史ある教会である。

まずゴットリーベンに何が起こり、ブルームハルトがそれにどう立ち向かったかを見ていこう。なお一連の出来事をブルームハルトは「戦い」（“Kampf”）と呼んでおり、ここでもその表現を使うこととしたい。

2. 「戦い」：メットリンゲンの出来事

2-1. ゴットリーベンの生涯と「戦い」の経過

（図-2並びに注及び資料参照）

ドイツの寒村メットリンゲンに、ゴットリーベン・デイトゥスという名の娘がいた。彼女は14歳ころから家政婦として働いたが、21歳頃から腎臓をわずらい、また一方の足が短かったために身体の不釣り合いを持っていたという。23歳の時に母が死亡、また父も翌1893年に亡くなっている。両親の死後ゴットリーベンは同胞と暮らすようになった。

母の死んだ年に、クリストフ・ブルームハルトという若い牧師がメットリンゲンの教会に着任した。その2年後の1840年ゴットリーベン達はメットリンゲン教会の近くに移住したが、引っ越した途端にガタガタ、ズルズル

*教育文化学部心理カウンセリング学科、元人間福祉学部医療福祉学科

キーワード：悪魔憑き、ブルームハルト、神の国運動、カール・バルト、メットリンゲン

するような音が家の中に聞こえだし、一緒に生活していた同胞達も不安な不気味な思いをするようになった。

やがてゴットリービンは痙攣を起こすようになり、家の中に「悪霊が出現する」ようになったという。ブルームハルト牧師はこの当時すでにゴットリービンに会っており、自宅も訪問していたが、家で起こっていることをゴットリービンが告げなかったため、具体的に知ることができなかった。

しかし1842年4月にゴットリービンの家に宿泊した知人がそこで起きた異常をブルームハルトに伝え、以後ブルームハルトはゴットリービンへの対応に追われることになる。家の中の激しい物音やゴットリービンの痙攣、やがて「悪魔の声」も出現するようになり、首のやけど、自傷行為、出血などが出現するため、ブルームハルトは熟考・祈り・断食をするようになる。

翌1843年になると、ゴットリービンの体から砂やガラス片、古釘などが出現し、また編み棒やピンが出たりもする。こうした激しい「悪魔の仕業」との対決の中、ゴットリービン達は一度は転居するが、転居先でもなお同じことが起こる。

1843年12月になると悪魔は兄のハンス・ユルクと姉のカタリーナにも出現するようになる。しかしクリスマスの日になって、カタリーナが狂乱しているあいだの夜中頃「イエスは勝利だ」という言葉がカタリーナの口から発せられ、これを境に同胞そしてゴットリービンの悪魔憑きは次第に消退していった。

辺鄙な片田舎でおこったこの事件は周囲の村々や多くの人々に喧伝され、役所も黙視することができないようなさわぎにまでなり、

出来事が収まった翌年の1844年、ブルームハルトは当局に「メットリンゲンにおけるゴットリービン・デイトゥスの病歴」という報告書を提出、これが彼の選集にも掲載され、事件は現在にまで伝えられることになった。

周囲の村々からは事件を伝え聞いた人々が病気の癒しを求めブルームハルトの元に集まるようになる。彼はその対応に追われたが、やがてバート・ポルという土地に施設を作り移住する。

ゴットリービンは事件のあと、ブルームハルト家の手伝いとして子供の世話をしたりして働いたが、39歳で結婚、3人の子供にも恵まれる。1872年に56歳で平穩なうちに生涯を閉じたという。ブルームハルトの子（同じくクリストフ・ブルームハルトという名前なので、「子ブルームハルト」と呼ばれる）は父の精神をよく受け継ぎ同じく全面的に父を助けて活動し、父ブルームハルトはゴットリービンの死の8年後に74歳で亡くなった。

2-2. 「戦い」の記録

この出来事の詳しい経過が今日までに伝わったのは、ブルームハルトの記録による。「戦い」が終息した1844年に、ブルームハルトは、ヴェルテンプルク宗務局（Konsistorium：教会の統轄機関）の要請で、一連の出来事の報告書を提出した。

この報告書には宗務局宛の手紙が添えられている。ここには出来事に対する彼の基本的な態度がよく現れている。「報告書に、私は随意に取捨選択を施すことができました。そして誰もが何の抵抗もなく読めるような叙述をすることは、私には造作もないことでした。しかし私は、そのようなことをする気持ちに

はどうしてもなれませんでした。私はここで包み隠しをせぬよう心がけました。それは、包み隠しをせぬよう私に要求するあらゆる権利をもっていられる尊敬する教会当局に対する責務のゆえだけではありません。それは同時に、私の主イエスに対する責務のゆえであって、私はこの方のためにもみ闘わなければならないのです。」

個人的記録ではなく、関係当局に提出された文書であることの重みもさりながら、当初提出された文書が不本意なかたちでひそかに流布してしまったため、ブルームハルトは改めて書き直して提出したのが今日伝わっている文書で、のちに選集²⁾に連載され今日に伝わっている。「戦い」の記録部分は後に単独に出版されもしている。このような事情があり、またブルームハルトのいわば「見た事実すべてを淡々と記録し明らかにする」という姿勢が、詳細かつ具体的な記録につながったといえよう。今から170年前の記録ではある。しかし、筆者は以上の記載からは、(内容は現代からは多くの人によって荒唐無稽かもしれないが)資料として取り上げるに足ると考える。

2-3. 「戦い」の人物像

2-3-1. ヨハン・クリストフ・ブルームハルト

ブルームハルトの伝記をあらわしたツェンデルは、彼の人柄について「非陶酔的」という表現をしばしば用いている。また精神科医のシュルテ³⁾はブルームハルトの人柄について次のように述べている。「不気味な靈魂を意のままに操る人でなく、高い暗示性と暗示の力をいろいろ持った特別に厳かで狂信的な

者ではない。臆病な人間ですらない。たいして他人に感銘を与える人格ではまったくなくて、事に動じない快活さ、自然さと親しみやすさがあり、大げさに騒ぎ立てない、地味で質素な男である。説教の中で、彼は素朴で内面的である。」

また後にふれることになる神学者のK. パルトは、次のようにブルームハルトの人柄について記述している⁴⁾。「彼は個人的には憂鬱質の人や悲観主義者とは正反対であったが、しかし傑出した仕方他人の重荷をともに担う人であり、全身の気孔を開いて自分を取り囲む被造物の嘆息を感じ取った。」

2-3-2. ゴットリーベン・ディトウス

ブルームハルトはゴットリーベンに対して、信仰深く人々に愛され知識の豊富な娘と記述している。「通った学校はさほどよくはなかったにもかかわらず、彼女は十分な知識を獲得した。これは彼女の恵まれた才能と、信仰篤い両親の誠実なしつけのおかげである。そしてブルームハルトの前任者の牧師の授けた授業が、彼女の心にすぐれたキリスト教的基盤を形成した。学校を終えた当初は、俗事にも愛着をもっていたものの、評判はいつも良かった。彼女は色々なところに奉公に出たが、それらの家々では、彼女が示した誠実さのために、今もって彼女の評価・印象はよい。1836年に患った腎臓病のために、彼女のキリスト教的性向はいよいよ強く真剣なものになっていった。36年以来、彼女はこの村に留まり、兄弟姉妹と共に静かにつつましく暮らしており、その堅実なキリスト教信仰のために尊敬され、愛されていた。」¹⁾

しかしブルームハルトの伝記作者であり、

生活の多くを共にし、ゴットリービンもよく知っているツェンデルは、これとは異なる記述をしている。ゴットリービンは「人付き合いが悪く、共にいて楽しいというような形容を付けるにはおよそほど遠い人物であり、むしろ気嫌いされつき合いづらく、人間関係においてとげとげしい感じのする人物」であるとして次のように述べているという¹⁾。「彼女の人柄を包んでいる外皮は、粗野であった。彼女は、その気の毒な娘時代のために、何かザラザラしたものを持っていた。そしてそれが、彼女の顔つきにも、からだつきにも、現れていた。それはまた、多くの点で彼女の内面的な人格にとって、実に似つかわしい衣装でもあった。したがって、彼女は、決して『愛すべき』とか『気持ちのいい』とかいう言葉でわれわれが理解して、互いに愛し合い褒め合うような人ではなかった。そうあるためには、彼女は、あまりにも厳粛な人生の学校を通り抜けて来たのであった。したがって、彼女にとっては、身分とか地位とかいうものは、無いに等しかった。彼女の鋭い目は、堪え難いほどであり、覆い隠されたあらゆる無用の存在に対する憤りが、可成りあらわに、その目から輝いていた。しかし、彼女の内面では、一切がただ献身と誠意のみであった。そして、相手に対する彼女の粗野なあり方の背後には、他には容易に発見できないような、愛ととりなしの熱心で聖らかな真剣さが隠されていた。しかし、彼女の最も深い特質は、『神の国の勝利に向かっての前進』というただ一つの思想の中に、まったく吸収されてしまっていた」

ツェンデル²⁾は次のように述べて、ツェンデルの見解に傾いている。「彼女は善良なキリ

スト教徒として生き、病気の後には、感動的な同居人、そして子供たちと患者の看護婦になったとブルームハルトは言っている。しかし彼女は幼児期から、魔術の主人公としてふさわしい性癖を見せていた。ある反発を起こさせる本性と異常なほどふさいだ内気さを持っていて、その背後には、高い自己顕示性が隠れていた。」

ブルームハルトとツェンデル・シュルテの記述の相違がどこに由来するかは別として、ゴットリービンが、対人関係に乏しく、自分本位といっても良いような人物であった可能性は否定できない。もちろん田舎の娘でそれほど豊かな教養が持てなかったこと、腎臓やその他の身体の不具合にもよるであろう。

2-3-3. ゴットリービンとブルームハルト

ゴットリービンがブルームハルトに会ったときの様子につき次のように記載されている。¹⁾

「彼女は彼に強くひきつけられると同時に、激しい反発を感じた。彼が就任の説教をしたとき、彼女は彼の目をえぐってしまいたいという衝動を覚えた。しかし他方で彼女は、彼の説教を聞くために、教会のあらゆる集会に出席している。さらには、足の障害のために歩行が困難であるのに、ブルームハルトが隣村で説教をするときには、わざわざ出かけて行くほどであった。」不自由な足を引きずりながら隣村まで出かけて行き（当時のことから大変な労力を要したに違いない）、またほとんどの集会に出席したことも記憶されるべきである。反発するにしろひきつけられるにしろ、彼女にとってブルームハルトは強い関心をもたざるを得ない人物として写ったのであろう。

一方1841年12月からの丹毒の病気の間、彼女は、彼を見るとそっぽを向き、挨拶には応えようとし、彼が祈るときには最初組んでいた手を広げてしまう、そもそも彼の言葉には耳を傾けようとし、それどころか彼が訪問する前や後にはそんなことはないのに、訪問するとほとんど失神しているように見える、などといった行動をとる。ブルームハルトには、わがまま、独りよがり、傲慢で、他の人にもそのように見られたという。ここではブルームハルトに対するゴットリービンのアンビバレントな面が認められる。

父母を相次いで亡くし、自身も身体の外面・内面にハンデを持ったゴットリービンにしてみると、前任牧師とことなり、若くまた新妻を迎えたばかりのブルームハルトは、まぶしくもまたひきつけられる人物であったろう。こうした気持ちは、彼女の病気の治癒へ全身全霊を傾けるブルームハルトとの共同の戦いを経て、仕事と家庭の両面のブルームハルトの援助者という立場を得て、おそらく外的にまた内的に安定し、やがて自身の伴侶・子供という家庭を得るまでに成熟したと考える。

精神療法師のベネデッティ⁵⁾は治療者が患者の苦悩を「担うこと」が「転移」とは異なる時間的次元をもっていると前置きして、ゴットリービンとブルームハルトの次のような対話を紹介している。すなわちゴットリービンが「あなたは私のために苦しい思いをされたでしょう。」「私に辛抱して下さったとは驚くほかはありません。」「あなたは最後までやりとげて下さった。」と感謝の意を述べたのに対して、「私は自分の患者を見捨てた悪魔たちによって弱くさせられるよりもむしろ強められたと感じました。」とブルームハルトが

応答したということ。それに続いて次のように述べている。「自分の医師に苦勞をかけたという病者にむかって、実はそうではなかったのだとはっきり言うようなことをしてしまうのは未熟な治療者だけであろう。病者は自分の伴侶に苦勞をかけたことを感じたいのである。なぜなら、病者はそうすることによってのみ、自分の『重み』に気づくからである。他者が自分の不平や非難、失望や苦悩の時間の重みを失望せずに耐えたということは、共人間的な意味で病者を『重みある』ものにし、病者の生の悲痛な重みを、いままでとちがうかたちで彼に担わせる。」ゴットリービンの人間の変化は、ベネデッティの述べるような苦難をともにするブルームハルトの姿勢が関与した治癒の成立と平行して実現したものと考える。

2-4. 「戦い」がもたらしたもの

この出来事のあと、ブルームハルトを訪問するメットリンゲンの人々の肉体的な病気がいやされるようになったという。ブルームハルトがド・ヴァレンティという精神科医（ブルームハルトを激しく批判した人物、後述）に対する「弁明書」の中で書いているところによれば、それは以下のようなものであったという¹⁾。人々が罪の告白のために訪問すると、ブルームハルトは彼らの話を聞き、最後に按手して罪の赦しの言葉を語る。「そのとき、私（ブルームハルト：筆者）には、他の言い方はできないが）一種の力が私から出た。その力が、不思議な仕方で、主として心の平安に対して作用し、さらに自覚されない形で、健康に対しての作用をも引き起こした。そして、私がおそのような健康に対しての作用に気

付くのは、何週間か経ってからのことであつた」。一例を挙げれば、一人の男が大腿部のひどいリウマチに苦しんでいた。それは、四週間ごと規則的に起こって、歩行中に突然倒れることもあるほどであった。この男に対してブルームハルトが按手して罪の赦しを告げると、何かがからだから出てゆくように感じて、その病気はいやされた。井上¹⁾によればツェンデルは、火傷、眼病、肺結核、精神病など、数多くの例を記しているという。

またこれも井上¹⁾によれば、ブルームハルトは、いやしの条件として悔改めを求めることはしなかった。ただ重要なことは教会の礼拝に出席させることで、個人的な対話には二次的な重要性しか認めていなかった。もちろんゴットリーベンの場合にもそうであったように悪霊の憑依を信じていたが、しかしそのために苦しんでいると思われる相手に対して、彼が求めたことは何よりも教会の礼拝に出席することであった（その場合でも、特別な目的をもった説教を彼は避けた）。福音を聞かせること以外に、悪霊を追い出す方法はないというのが彼の確信であった。

3. 考 察

3-1. 精神医学からみた「戦い」

精神科医の中には「戦い」を「単なる病気」として切つてすてる者がもちろんいる。先にあげた同時代のベルンの精神科医ド・ヴァレンティを例としてあげよう。1844年のブルームハルトの「報告書」を彼が酷評したのは1849年である。それによれば、ゴットリーベンの病気は複合的なヒステリーで、彼女の極度の恍惚状態と欺瞞、ブルームハルトの宗教的傲慢（宗教的偉人としての自己の力能の誇示）

と迷妄の奇跡信仰によるという。

ゴットリーベンの病気はその記載内容から、解離性障害ないしヒステリーとすることは至当であろう。後弓反張・けいれん・幻視といったエピソードがその裏付けとなる。またごく近くで生活していた姉・兄が同様の症状に陥ったことは感応状態と考えられよう。

一方、例えば大量の古釘、編み棒、長い棒が体の中から出て来たというブルームハルトの目撃、大量の出血が鼻からだけではなく目や頭から出現したというエピソードは、ヒステリーの呈する症状とだけ片づけてよいのかという疑問を持つ。

ゴットリーベンには前述したように身体的な障害がある。このような障害は、いかに田舎であろうとも20代の女性にとって大きな引け目であったにちがいない。加えてこれも先に述べたように「戦い」がおこる直前に両親を相次いで失ったことも大きな出来事であったにちがいない。このような時に赴任し、新妻を迎えたブルームハルトは、ゴットリーベンにとってはまぶしく、あこがれを抱かせる反面、自分と引き比べて敵意を覚えさせる存在となったのではなからうか。そして治癒以降の彼女の経過は、敵意の消失とともに、ブルームハルトに対する愛着に関しては、彼の家庭の内外からの良き援助者となることによって、円満に着地した可能性を考える。

もちろん1840年代のドイツの片田舎という時代と地域背景は、このような「戦い」がおこってよい迷信的・魔術的な素地を備えていたことであろう。この地域のキリスト教信仰は敬虔主義的な色彩が濃く、車で1時間程度離れたバード・リーベンツェルは、時代はあとになるが、日本にも宣教師を派遣している

リーベンツェラ・ミッションを生んでいる。

メットリンゲンの「戦い」はゴットリービンの精神的な病気の治癒、さらには全人的な癒しになったが、実際には、今日的な視点で言う感応状態となった姉のカターナにとりついた悪魔の離脱がその終結である。ゴットリービンにとってみれば、自らの体験を、今度は姉の病態の中に見ることになったのである。感応状態では通常発端者と継承者のあいだは相互に作用しあって悪化していくことが多いのと対照的となるが、姉の様態を目前にして、自分からも「悪魔が去っていった」ことを確認したにちがいない。

心理学者テオドル・ボヴェーは、ブルームハルトの「報告書」が1975年に新しく出版されたとき、その解説として、ゴットリービンのいやしについての心理学者としての解釈を記し、その結論的な部分で、次のように言っている。井上¹⁾はまとめている。「たしかにゴットリービンは、ヒステリーに苦しんでいた。しかし、それは根本的な苦悩ではなくて、人格全体が陥っている危険の症候にすぎなかった。ブルームハルトは、感情転移 (Übertragung) と反対感情転移によって、精神療法的にゴットリービンに作用を及ぼしているが、しかしそういうことによっては、彼女は、ただ本来のいやしに対しての準備を与えられたにすぎない。(中略)『悪魔の試練』を、悪魔などとは何の関係もない超心理学的現象として理解することもできる。しかしそれらの現象は、この病気の関連全体において、明瞭に人格の破壊に向かって進んでいた。それは [人格の] 全体を形成しているものを、ごちゃまぜにしようとしていた。そしてそのことによって、それは『悪魔』[ディアボロスとい

うギリシア語は、ごちゃまぜにするという意味の動詞から来ている]の道具となっていた。そのような状態に対しては、唯一つ真にふさわしい『いやし的手段』は、イエスに呼び求めるということであった」。ここにはゴットリービンを単なるヒステリーという病気を持つ婦人として見るだけではなく、人間を全体として眺める視点がある。

ところでブルームハルトは医学や医療をどうみていたのであろうか。この点について、井上はつぎのようにまとめている¹⁾。「彼(ブルームハルト)は、医術が謙遜である限り反対するいわれはなかった。病気についての彼の理解に正面から対立するものは、医術ではなくて、むしろ別のも—すなわち、当時民衆の間に広がっていた迷信的なもの、魔術的なものであった。したがって、彼において起こった様々ないやしを迷信的なものと混同するほど甚だしい誤解はない。彼にとっては、魔術的なものに対する信頼そのものが、正しい福音信仰に対する挑戦であり、世界を脅している悪魔的な力の現われ以外のもではなかった。悪霊的なものを排除する近代的理性は、どのように非陶酔的に見えても、それはいつも迷信にまつわれ、それから離れることはできない。それに対してブルームハルトは、近代的理性にとっては荒唐無稽とも見える聖書の世界に生きることによって、かえって迷信的なものと戦うことができた。」

「人間を捕らえて罪人とする暗黒の力は、単に人間の魂だけを脅かすのではない。人間の全領域が、その脅威のもとに置かれている。ブルームハルトは、病気を人間の自然的現象とは考えない。もちろん、病気が何らかの外面的な誘引で起こることは事実だが、本来の

原因は、一層深いところにある。すなわち、彼は、聖書に従って、病気を罪との関係の中で理解する。『聖書によって、われわれは、病気が一部分は罪の直接的な結果であり、一部分は罪に対する神の直接の刑罰であることを知っている。禁断の木の実を食べた後で、最初の父祖たちが、自分が裸であるのを知ったということは、その木の果自身が、からだと精神に有害な結果をもたらしたということ、を、証明する。』したがって、彼にとっては、一方に健康な人間がいて、他方に病気の人間がいるというのではない。人間全体が病んでいるのである。」

以上からは、ブルームハルトが魔術的な癒しと混同することなく（むしろそうしたものは敵対し）医学・医療をそれなりに位置づけていることがわかる。ただし彼は病気（あるいは人間の不幸のすべて）の背後に働く悪を信仰の目でみており、現実場面では、部分としての病気ではなく、人間全体が病気と見ていたということであろう。

3-2. 「精神医学と神学の対話」からみた「戦い」

1949年から50年にかけて、チュービンゲン大学精神科のヴァルター・シュルテと、子ブルームハルトの女婿で父ブルームハルトの選集の編集者でもあるオットー・ブルーダーの間で、行われた一連の対話³⁾は、「戦い」を巡る精神医学者と神学者の対話である。この中でシュルテは、「神学者と医学者の誤った対立から出発するのではなく、双方の関心を結び付ける観点、すなわちキリスト者であり医師であるという観点から出発したい」と前提して、「戦い」に対する畏敬と医学者とし

ての冷静さを保ちつつ自己の考えを述べている。その内容を井上¹⁾は次のようにまとめている。

(1) ゴットリーベンは精神病理学的に理解すれば神経症的・ヒステリー症的な障害である。そのような認定は、恐らく多くの神学者を、失望させるだろう。

(2) しかし、ゴットリーベンの「戦い」は精神病理学的に理解できる個人的な病気を超えている。医学的理解には示されないような領域が、ここには姿を現している。

そのような認定は、恐らく多くの医学者を失望させるだろう。

(3) しかし、当時はそのように見なされなかったが今日ではヒステリー症と見なされざるを得ない障害の克服によって、「イエスは勝利者だ」という証しを貫徹することを神はよしとし給うた。

(4) その場合に、信仰者たちが、ゴットリーベンの病状に驚いて、憑依について語り、そのような状態の克服が、彼らに奇蹟という印象を与えたとしても、それに対して、精神医学的立場から、反対することはできない。それは、別の平面上のことである。

(5) 病気と憑依状態、医学的治療と奇蹟は、絶対的に相互排除的なものではない。それらは、場合によっては、同じ出来事の二つの可能な観点でありうる。

(6) この出来事の多くの点は、（単に医学的見地にとってだけではないが）解きたい謎に包まれているが、この出来事が、当時それに驚愕した人々によって、まったく純粹に奇蹟として体験され、彼らを

新しい確信で満たしたということに、固着するのが重要である。

北大の精神医学教室を主宰した著者の恩師 諏訪望⁶⁾は、個人的にはキリスト教信者であり、自らの信仰と精神医学との関連について、この二つを安易に混合してしまってはならないと述べる一方、この二つは、いわばルビンの図形のように、視点によって見えるものが異なる関係にあると言う。シュルテ³⁾は、同様のことを別のたとえで次のように述べている。「それは、ちょうど物理学で、全体的には理解できぬ光という現象が、波動説の観点からも、量子論の観点からも—それらの理論は相互排他的なものではない—考察されるのと、同様である。」いずれも信仰と精神医学というふたつの視点を安易に混在させず、あるいは一つの視点からだけ見ず、同時に視点の自由な転換によって相互排除をさげようとする。ただしこの「自由な転換」という点についてはさらに後に考えてみたい。

3-3. 神学から見た「戦い」：「神の国」 思想への寄与

3-3-1. 「戦い」の神学的評価

神学者のなかには「迷信的なこと」として一顧だにしない者もある。ここでは例として高名な神学者ルドルフ・ブルトマンを挙げておこう。ブルトマンはこの出来事を「虫ずが走る嫌なこと (Greuel)」だと評した⁷⁾。「新約聖書における悪霊表象は、近代世界の中で生き続けたり再生される場合には、全くの迷信である、と私は主張する。教会は、そうしたものを根絶する義務をできるだけ速やかに果たさなければならない。そのようなものは、ケリュグマの真の働きを危うくするだけだか

らである。ブルームハルトの出来事には、私は虫ずが走る」。

一方この「戦い」が何故神学および思想上に意味を持つようになったかという視点に立てば、「戦い」が人間世界への神の国の顕現として見られうるだけの資質を備えているということであろう。それはさらに二千年余のむかし、イエスが行った悪霊憑きの癒しと直結する。つまり単なる類似でなく同一の出来事として、ブルームハルトや周囲の人々の目に映ったこと、ゴットリーベンの癒しがイエスの癒しの再現と見なされたということであろう。

イエスの生涯と事績について記載した新約聖書の文書のうち、マタイ・マルコ・ルカは類似する部分が多く、共観福音書と呼ばれている。このうちマタイ・ルカは資料の多くをマルコに負っていることから、マルコ福音書は三つの共観福音書に先立つ資料文書と考えられてきている。そのマルコ福音書におけるイエスの最初の肉声は「神の国は近づいた」という言明であり、最初の奇跡が、悪霊に憑かれた男の癒しである。

この点につきK. バルトは「誤解してはならないことは、それが内容的には、(新しい特別な啓示の性格を持っているなどということとは決してなくて) 新約聖書における様々な言葉の総括にすぎず、その最も簡潔な表現にすぎないということである。」と前置きして以下のように述べている⁸⁾。「ブルームハルトがこの『イエスは勝利者だ!』という言葉聞いて受け容れた、この出来事は、それに対応する新約聖書における出来事と同様に、次のような三つ相(ママ)を持っている。すなわち、その第一の相に目を注げば、それは、

現実主義的に、新旧の神話という意味で評価される。また、その第二の相に目を注げば、それは、近代的な精神病理学や深層心理学にもとづいて評価される。また、その第三の相に目を注げば、それは、決して説明はされずにただ評価だけなされる。すなわち、それは（第一第二の説明も可能であり、そのようなものとしてそれなりにその権利を持っているという前提のもとではあるが）霊的に評価される。

この出来事の霊的評価は可能であって、それは、あの病氣と癒しの出来事から生じたものによって明らかであり、ことにブルームハルトとその周囲の人々があの決定的な日に聞いた言葉から彼の生涯と働きの中で（そしてその後その子クリストフの生涯との働きの中で）生じたものによって、明らかである。あの二年にわたる『戦い』とその結果が、どのように説明されるにしても、あの出来事の果実と、ことにあの言葉の帰結は、その時に始まる本来の『ブルームハルトの出来事』において明白である。すなわち、甦り給うたイエス・キリストの卓越した生からの、新しい逡巡せぬ出発。そこに起こりまた見いだされる罪の赦しを述べ伝えるための、当然のこととなった新しい力と喜び。彼において近づき来たった御国の実在性が—また彼において打ち建てられた神の支配が、当然のことながら新しく重大視されたこと。そのような支配のさらなる自己告知への—否、さらにすべての肉に対する聖霊の新しい注ぎへの（ブルームハルトは、あの出来事の中で、またあの言葉の告知の中で、そのことが始まるのをみたのであるが）、抑え難い期待と打ち砕かれぬ希望の中でなされた新しい祈願。『死ぬ。キリス

トが生き給うために』との、強力な訴え。新天地の到来と啓示に対する大胆な確信における生活。したがってまた、世の出来事、罪と苦しみの中にある人間たち、彼らすべてが（それ知っていようと知ってまいと）召されているもの—それらに關しての深く掻き乱された思い。しかしまた、さらに一層深く慰められた思い。—それらのものは明白である。」

かくして「戦い」、そしてゴットリービンの癒しは、敬虔主義と自由主義という当時の二つの神学思想を超え、神の力のこの世における顕現を希求する「神の国」思想へと結びついていく。その中に宗教社会主義と弁証法神学がある。金井⁹⁾は次のように述べている。「宗教社会主義と弁証法神学に共通な本質的強調点とは、この世界に対する『神の主権的支配』を信じる終末論的な希望である。この終末論的希望を両者はブルームハルトに負っている。（一部略）両運動の三人の指導者、H・クッター、L・ラガーツ、K・バルトがそれぞれこの南ドイツの「神の国」の説教者の影響を強く受けたことは良く知られている。彼らは三者三様の仕方でブルームハルト的モチーフを深く受け止め、それを、それぞれに展開させあるいは徹底させた。」次にこの二つの「神の国」思想と「戦い」およびブルームハルトとの関連を見ていこう。

3-3-2. 宗教社会主義

19世紀に広がった資本主義の矛盾に敏感に気づき、具体的にはたとえば工場労働者に対する非人間的待遇に目をむけたキリスト者たちがいた。彼らはキリスト教の社会的責任を強調し、共産主義的の革命ではなく、例えば協同組合を通じて労働者の教育や社会環境の改

善、生活向上をめざした。こうした社会主義的なキリスト教は、伝統的な古い形の敬虔主義とは別なキリスト教の潮流を形成していった。「戦い」、そしてブルームハルトの思想は、この立場に立つ者たちにとっては、社会的の中で救済をもたらす此岸的な神の力の希求と現実の中の具体的な救済への努力と結びついていった。

3-3-3. 弁証法神学：カール・バルト

18世紀から19世紀にかけて、キリスト教は合理主義・道徳主義へと大きく転換していったが、この流れは20世紀の初頭に再び大転換する。この転換を遂行した人物がカール・バルトだが、そのバルトに強烈なインパクトを与えたのがブルームハルトである。ブルームハルト父子の思想や信仰を、おそらく日本で初めて本格的に紹介した井上も、カール・バルトとの結びつきを重視する。

バルトの視点からは、「戦い」の示した超自然性・奇跡が重要なのではなく、そこにブルームハルトが、そしてさらには多くの人々が共通して認めた神の力の顕現、特に現実の中におけるそれこそが見るべきもので、逆にいえば、日常的・非奇跡的なことから神の力の顕現は読み取れるはずである。

私見だが、現実のこの世界における神の介入というブルームハルトの思想と姿勢は、ナチスとの熾烈なドイツ教会闘争における（たとえばバルメン宣言に見られるような）、神の国と力への絶大な信頼に見てとれる現実の行動への原動力の一つとなって流れこんでいるように見える。

ただしバルト、そしてブルームハルトは、一貫して「神の国」の彼岸性に固着していた。

次に宗教社会主義と弁証法神学におけるこの差異について見ておこう。

3-3-4. 「神の国」の此岸性と彼岸性

前項に見た「神の国」思想の此岸性と彼岸性は、ゴットリーベンの救いを病気の治癒と見るか神の救いと見るかに関連性を持つように一見みえる。病気の治癒とみてブルームハルトが治療者としていかに有効に立ち向かったか、神の救いと見て「戦い」を神の奇跡としてとらえるかを見る二分である。しかしことはそう単純ではない。

宗教社会主義と弁証法神学の「神の国」思想における此岸性と彼岸性について、金井は次のように述べている⁹⁾。「バルトによって『ハイフン付きのキリスト教』（たとえば『宗教-社会主義』のように）と呼ばれ批判されたこの立場の根本的特徴は、信仰的情熱と使命感から異質な二つのものを積極的意図的に結合しようとするところにあり、したがってその『ハイフン』は、何ら消極的妥協的なものではない。（中略）これに対して『待合室のキリスト教』（ラガーツ）と揶揄されたバルト的立場はたしかに-ラガーツとの対決において-『待つこと』を強調する結末になった。しかし、そこには、元来強い社会的実践への志向があったことをわれわれは見てきた。しかも、その実践が『神の国の社会に対する攻撃』であると言われる限りにおいて、この立場もやはり同じ『神の国』のインパクトから行為するのである。しかしながら、その『神の国』とは、あくまで彼岸的質におけるものであり、ゆえにそのインパクトはあくまで隠されたものである。したがって、その実践は『神の国』の地上的体現や実現であるこ

とをもちや公言も標榜もしない。そもそもそのような体現や実現を可能性として認めないのである。したがって、その実践はこの世の人々と『単純に事柄に即した共働』を行なうこと以上ではなく、その場その場で『社会の中で神のみわざに注意深く従ってゆく』こと以上であってはならないとされるのである。」

神と神の国、人と人の国、あるいは彼岸性と此岸性を結ぶもの、そしてメットリンゲンにおける「戦い」を神の力の顕現とみる視点は、キリスト教という秘儀と表現できるのではないか。この秘儀という言葉、バルトの言明に限定しても容易に内容把握できるものではなく、ましてや安易に使用できる言葉ではないが、あえて言えば、先のルビンの図形の視点の変換が、見る者の自由な変換によるのに対して、秘儀とは、何者かによって、視点の変換をいわば強制的にさせられる体験と筆者は言っておきたい。それはブルームハルトの「戦い」だけでなく、新約聖書におけるイエスの奇跡、とくに悪霊からの解放物語をいかに理解するかという課題とも軌を一にすると考え。そしてブルームハルトが「戦い」のあとしばしば口にする「待ちつつ急ぎつつ」という言葉と姿勢は、その秘儀を待ち望む人間のあるべき態度のように思う。

4. まとめ：病跡学からみた「戦い」

日本病跡学会のホームページには、病跡学とはどのようなことを指すかについて、次の二人の先学の言葉を載せている¹⁰⁾。「精神的に傑出した歴史的人物の精神医学的伝記やその系統的研究をさす（宮本忠雄）」「簡単にいうと、精神医学や心理学の知識をつかって、天才の個性と創造性を研究しようというもの

（福島章）」。

今更いうまでもなく病跡学は傑出した人物や天才と呼ばれる人間の精神医学や精神病理学からの分析が主たる作業である。対象とするのは人物、しかも人類への積極的な貢献をなした人物である。

一方本論考は特定の人物ではなく、ある地域に起こった出来事を取り上げている。ブルームハルトやゴットリービンはまったくの田舎娘や一介の牧師であり、特別な天才や傑出人ではない。この点で本論考は本来の病跡学から逸脱している。しかしゴットリービンとブルームハルトを中心としたこの「戦い」のもつ意味とひろがりを考え、しかもそれは精神病理学的な事態でもあることから、病跡学の守備範囲内に位置づけようと筆者は考えている。

「戦い」はなぜ神の国を示唆したのか。簡単に考えればヒステリーの女性にとりついたのが悪魔と自称したからだだろう。ヒステリーといっても解離性遁走や、いわゆる転換性障害であれば、ここまで宗教的・神学的な広がりをもたらすことはあるまい。せいぜい牧師が関与したひとつの宗教的癒しの例にとどまったことだろう。

非日常的な宗教的原点が当初の形とエネルギーをそのまま保ちながら日常の中で持続していくことは困難である。M・ヴェーバーの言う、カリスマの日常化という過程が始まらざるを得ないのである。非日常のカリスマは、定型化した制度へと変質していく。バート・ボルは医療の方向に向かい、制度や施設として定着していった。しかしこうした宿命的変質は、カリスマ的な出来事の直後からすでに始まっていた。

父と同じくパート・ボルを拠点に活動を進めた子ブルームハルトは、ある時「昨夜私は、一通の手紙を開いて、非常に驚いた」と前置きして、次のような経験を記しているという¹⁾。「何かのことで絶望に陥った一人の男が、ブルームハルトのことを聞いて、その数週間前に手紙を送って来た。ブルームハルトの答えで、そのような状態から立ち直ったのであろう。彼は、その手紙の中で、ブルームハルトに感謝すると共に、『勘定』をしてくれと頼んで来た。そして、自分の状態は今も良くなったが、またいつか悪くなったらよろしく頼むと書いてあった。」

ブルームハルトは、そのような経験を話した後で、「私は、泣かざるをえなかった。自分のためというのではなく、救い主のために」と語っていたという。宗教者である子ブルームハルトは嘆いたであろう。しかし精神科医の仕事は、このような男のセンスを前提にすすめられるのではないか。皮肉な言い方かもしれないが、医療はむしろこうした人間を対象にすることから始まる。

一方、井上⁴⁾はカール・バルトが「十九世紀のプロテスタント神学」のブルームハルトに関する章の中の「イエスの出現によって、単に心情の問題 (Gesinnungsfrage) が提出されたのではなくて、力の問題 (Machtfrage) が提出された」という言明⁴⁾に注目している。ブルームハルトが、この「戦い」を通して、聖書が指し示す救済が単に心情の問題ではなく、力の問題として捉え、「戦い」の問題として捉えたということが、彼を敬虔主義から区別すると共にバルトらに伝えたもっとも重要なものの一つだと思われる。

ブルームハルトがゴットリービンの悲惨の

中に見たものは、今も力を振るっている闇の力の支配のもとにある人間の姿であり、そのような事実直面して、彼が覚えたのは、「憤怒」(Ingrimm)であった。そしてゴットリービンという対象が示した病態(つまり悪魔憑き)よりもむしろ、ブルームハルトがいただいた「憤怒」という感情が(ことの理解を人間の出来事に明確に限定するという条件の中では)より意味があるのではないか。

一方、「戦い」のなかで牧師として苦悩し、黙想し、教会という場で実践・活動するなかからつかみだした「待ちつつ急ぎつつ」という言葉と姿勢のなかでブルームハルトは、「神の国」が「すでに来ている」という彼岸性を信じるとともに、「まだ来ていない」という彼岸性により重きを置いた。精神のやまいの中に創造、特に宗教的な創造を目撃するために「戦い」から引き出しうることの一つは、「待ちつつ急ぐ」こと、特に「急ぐ」ことよりも「待つ」ことの大事さと筆者は考える。

【参考文献】

1. 井上良雄：神の国の証人・ブルームハルト父子。新教出版、東京、1982
2. J. Chr. Blumhardt: Gesammelte Werke-Schriften, Verkündigung, Briefe. (hrsg. Gerhard Schäfer), Reihe- I, Band-1: Der Kampf in Möttingern, Texte. Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1979
3. Walter Schulte, Was kann der Arzt und Psychiater zu J. Chr. Blumhardt, zu Krankheit und Besessenheit sagen?, in : Evangelische Theologie, 1949/50, S.151 ff. Otto Bruder, Zu den Heilungen Blumhardts,

in : Ev. Th., 1949/50, S. 478 ff. Walter Schulte, Zu den Heilungen J. Chr. Blumhardts, in : Ev. Th., 1950/51, S. 91 ff.

4. バルト, K. (佐藤貴史 (訳)) : ブルームハルト (バルト, K. (佐藤敏夫 (訳)) : 十九世紀のプロテスタント神学)
5. ベネデッテイ, G. (小久保享郎、石福恒雄 (訳)) : 臨床精神療法. みすず書房, 東京, 1968
6. 諏訪 望 : 問題の所在 (諏訪 望 : 急がずに休まずに. シヤローム印刷, 東京, 1992)
7. Rudolf Bultmann : Zu J. Schniewinds Thesen, das Problem der Entmythologisierung betreffend, Kerygma und Mythos, Bd.I
8. バルト, K. (井上良雄 (訳)) : 教会教義学, 和解論Ⅲ / 2. 新教出版, 東京, 1985
9. 金井新二 : 「神の国」思想の現代的展開 - 社会主義的・実践的キリスト教の根本構造. 教文館, 東京, 1982
10. http://pathog.umin.jp/pathography/bing_ji_xuetoha.html

【注】

注 : 「戦い」の記述はブルームハルト選集²⁾、並びに宇都宮輝夫教授 (北大大学院文学研究科) の講義資料の私訳 (下記の資料) による。ただし文責はすべて筆者にある。なお本項の記載は井上の成書¹⁾に多くを負っている。

【資料】ゴットリービンの生涯と「戦い」の経過

本資料は宇都宮輝夫教授 (北大大学院) が北海道大学で行われた講義のために私訳され、使用を許可下さった資料である。ただし文責はすべて論文筆者にある。悪魔憑きの時期を中心に、ゴットリービンの生涯を前後に分けて記述する。

1. 「戦い」の前

1815年10月13日 (0歳)

メットリンゲンにて生誕 (13人同胞の12番目)。幼児洗礼

1815年 (0歳) / 1823年 (8歳)

「加持祈祷」(“Besprechung”)にて小児疾患の治療。一時、叔母のマリア・バーバラ・デイトゥス宅に滞在。

1829年 (14歳) まで

メットリンゲンにて就学

1829年 (14歳)

堅信礼

1829年 (14歳) から

ヴァイデルシュタットで約8年間、その後アルトブルクのベツナー牧師のもとで家政婦として働く

1836 (21歳) ~ 1838年 (23歳)

下腹部の疾患 (「腎臓病」と「胃のむかつき」)。そのほかに一方の足が短く、このため身体の左右は不釣り合い。家政婦の仕事を終えてメットリンゲンに在住

1838年 (23歳)

母クリスティーナ死去。(同年2月ブルームハルトがメットリンゲンの牧師となる。

同9月4日、ドーリス・ケルナーと結婚)

1839年 (24歳)

父ヨハン・ゲオルグ・デイトゥス死去

2. 「戦い」の時

(ゴットリービンの精神症状の開始の時期 (1840年2月) をAとし、終息した1843年12月をZとする。)

1840年2月 (24歳) (A年±0ヶ月、Z-3年10ヶ月)

ブルンネン街3番地へ転居 (現在のブルームハルト通3番地、ゴットリービン・デイトゥス・ハウス)。後日彼女が語ったところによれば、この家に最初に足を踏み入れるなり、奇妙な力、ある独特な力が自分に作用するのを感じた。何か不気味なものが見えたり聞こえたりするようにも思われた。

彼女の同胞もやはりそうだった。引越した最初の日に、「主よ、きたりませ」などと祈っていると、突然発作に襲われ、意識を失って床に倒れてしまった。この時には、何かものを叩くような音と引きずるような音、ガタガタ、ズルズルという音 (Gepolter und Geschlürfe) が聞こえた。この音は彼女の同胞にも聞こえ、彼らを不安に陥れ、二階にいた別の家族の者たちも不安に駆られた。それはしばしばくりかえされ、時折一晩中続いた。しかし、一家の者はみんなこわくて、それを人に知らせようとはしなかった。ゴットリービンにさらに、自分だけで特殊な体験もした。夜に彼女の手が無理やり重ねられるとか、人物や光が見えるなどといった体験である。

1840 (25歳) ~ 1841年 (26歳) (A年・Z - 3年 ~ A + 1年・Z - 2年)

けいれん、悪霊の出現、ブルームハルトへの拒絶的態度

1840年 (25歳) (A年・Z - 3年) 中頃
胸の出血

1841年 (25歳) (A + 1年・Z - 2年) 5月
デイトゥス・ハウスに幽霊が出はじめる

1841年 8月16日 (25歳) (A + 1年 6ヶ月・Z - 2年 4ヶ月)

悪魔の憑依のはじまり

1841年秋 (26歳) (A + 1年・Z - 2年)

ブルームハルトの執務室への訪問。ゴットリービンは、夜毎の試練と心労が甚だしくなったので、牧師館にブルームハルトを尋ねる。しかし彼女は自分の苦しみについてははっきりとは話さなかった。彼は彼女のことが十分には理解できず、慰めになるようなことは何も言えなかった。その後彼女は、自分のそれまでの生活について自分から打ち明けた。そうすることによって、あの苦しみにから逃れたいと思っていたのである。

1841年12月 (26歳) (A + 1年10ヶ月、Z - 2年)

翌年の2月にかけて顔面が丹毒にかかって叔母 (おそらくマリア・カタリーナ・シュタンガー) のもとへ一時転居。

1842年 4月 (26歳) (A + 2年 2ヶ月、Z - 1年 8ヶ月)

デイトゥス・ハウスへ帰宅。現象の再燃。ゴットリービンの友人女性の一人がデイトゥス・ハウスに宿泊。呪文のような紙切れ第1回発見。彼女の親戚が二人、助言を得ようと思ってブルームハルトのもとに行く。そこで初めて彼は彼らから幽霊現象につい

て知らされた。ゲポルターは、(家の中で職人が仕事をしているような激しい物音になったため) 近隣中に知れ渡ってしまい、もはや黙っているわけには行かなくなったのである。

(中略)

ゴットリービンが当時非常にしばしば見たのは、二年前に亡くなった当地のある女性の姿で、腕には死んだ子供を抱いていた。この女性の名を彼女は最初語らず、のちに始めて彼にのみ教えた。彼女が言うには、この女性はいつも彼女のベッドの前のある位置に立ち、時折彼女のほうに寄ってきて、しばしば次のような言葉を繰り返した。「やすらぎを得たい」「紙を一枚ください、そうすればもう来ません」など。

1842年 4月24 - 26日 (26歳) (A + 2年 2ヶ月、Z - 1年 8ヶ月)

デイトゥス・ハウスで第2・第3の呪文の紙片発見

1842年 5月12日 (26歳) (A + 2年 3ヶ月、Z - 1年 7ヶ月)

デイトゥス・ハウスでの第4の呪文の発見。幽霊の動きが活発化。メットリンゲンに近いメルクリンゲンという町にシュベートという医者があった。彼は彼女の治療をしていたが、いつも同情をもって彼女に接し、彼女のほうでもそれまで彼だけには信頼を寄せて色々なことを話していた。シュベートは、好奇心を持った他の人々と共に二度彼女の部屋に泊まった。彼が体験したことは、彼の予想を越えるものであった。こうしてこの件の噂はメットリンゲンだけではなく、周辺の地方一帯に広まり、好奇心に駆られて当地に旅行してくる人々まで現れた。このような大きな騒動を憂えて、ついにブルームハルトは抜き打ち的にゴットリービンの家を夜に調査しに行くことに決心した。

1842年 6月2 - 3日 (26歳) (A + 2年 4ヶ月、Z - 1年 6ヶ月)

ブルームハルトが家に足を踏み入れるや否や、物を打つような激しい音が二度響いてくる。それに引き続いてさまざまな物を打つ音、叩く音が聞こえてきた。それらは主としてゴットリービンが寝ている部屋から聞こえた。家の外や二階の配置について調べていた者たちも一切の音を聞き、暫くしてから一階の家に集まってきた。物音のする元はそこだと確信したからである。騒音は次第に激しくなり、特にブルームハルトが讃美歌を歌おうと言い出したり、祈り

の言葉を二、三口にしたときはなおさらひどくなった。3時間のうちに約25回、部屋のどこかをドーンと打ちつけるような物音（Schlag）がした。それはあまりに激しかったので、部屋の椅子が飛び跳ね、窓がガタガタ鳴り、天上から砂が落ちてくるほどであった。

1842年6月3日（26歳）（A + 2年4ヶ月、Z - 1年6ヶ月）

この日は金曜日で、教会の礼拝にはゴットリービンも出ていた。30分後に、彼女の家の前にすごい人だかりができていた。使いの者がブルームハルトに告げるところでは、彼女は失神して死にかけていた。彼が急いで彼女の家に行くと、彼女は硬直してベッドに寝ていた。頭と腕は燃えるように熱く、震えており、息が詰まっているようであった。部屋は人で溢れており、ちょうど当地にきていた隣村の医者が駆けつけていて、意識を回復させようと二三の治療を試みたものの、じきに頭を振っていった。ゴットリービン、血縁の女性（おそらくマリア・カタリーナ・シュタンガー）、その後地区委員のヨハン・ゲオルグ・シュタンガーのもとへ避難。同時にブルームハルトは、ゴットリービンにも、当分の間自分の家に足をふみいれないように要求した。実際彼女は、翌年の半ばまでそこに入らなかった。ブルームハルトは時折村長や他の何人かの信頼の置ける人たちと共にこっそりと彼女を訪問しながら、ことの成り行きを見守ることにした。

1842年6月17日（26歳）（A + 2年4ヶ月、Z - 1年6ヶ月）から

ゴットリービンが移った家でもやはりゲポルターは続き、彼女はすぐに激しいけいれんを起こすようになる。それは次第に激しくかつ長くなっていき、5分間としてそれから解放されるということがないほどになった。

1842年6月26日（26歳）（A + 2年4ヶ月、Z - 1年6ヶ月）から

事態の「転換」（“Wende”）。ブルームハルトによる牧会的対応の開始。ある日曜の晩に重要な出来事が起こる。ブルームハルトが彼女のもとにいくと、何人かの女友達に来ていた。彼は黙って恐ろしいけいれんを見ていた。彼は少し離れたところに座った。彼女は腕をよじり、頭を脇のほうに曲げ、体を上の方に高くそらしていた。口からはたびたび泡が流れ出た。これまでの経過から見て、ブルームハルトには、そこに

何か悪霊的なものが働いていることは明らかだと思われた。それほど恐ろしい事態の中で、何の手段も助言も見出せないということが、彼には苦痛であった。そのように考えていると、ある種の憤りが彼を捉えた。かれは飛び出して行って、彼女の硬直した両手をひつつかみ、その指を力ずくで祈るときのように組みあわせた。そして、意識を失ったままの彼女の耳に向かって、彼女の名を大声で叫んで言った。「手を合わせて、主イエスよ、助けて下さいと祈りなさい。私たちは随分長い間、悪魔の仕業を見てきた。今度はイエスに何ができるかを見ようではないか」。するとすぐに彼女は覚醒し、彼が言った祈りの言葉を繰り返した。するとけいれんは完全にやんだ。

1842年7月（26歳）（A + 3年4ヶ月、Z - 1年5ヶ月）

「悪霊の声」（“Geisterstimme”）の出現。ブルームハルトは意を決し、必要最小限に二三の質問をする。まず、例の婦人（ゴットリービンに憑依している幽霊）に対して、「おまえは墓の中で安らぎが得られないのか」などといったことを。「得られない」「私のしたことの報いなのだ」。ブルームハルトは他の人物と話しているのだと考えながら、問い続ける。「おまえはすべての罪を私に告白したのではないのか」。「いや、私は子供を二人殺し、畑に埋めたのだ」。「おまえには何の助けも無いのか。祈ることはできないのか」。「できない」。「おまえは、罪を赦してくださるイエスを知らないのか」。「その名を私は聞くことができないのだ」。「おまえは一人きりか」。「いや」。「誰がおまえと一緒にいるのだ」。怒った声で、「最も邪悪なる者だ」という答えが飛び出してきた。

1842年7月24～29日（26歳）（A + 3年4ヶ月、Z - 1年5ヶ月）

「悪魔」（“Dämonen”）の猛威。首の火傷、自傷行為。ある夜、ゴットリービンが寝ていると、突然燃えるような手で首を捕まれるように感じた。同じ部屋で寝ていた叔母が明かりをつけると、首中に水膨れができていた。これがひどいやけどの跡を残した。翌日やってきた医者は、ただただ驚くばかりであった。首は数週間たつてようやくなおった。そのほかにも、日夜彼女は、脇、頭、足などに一撃を食らい、そのため彼女は通りにいようと階段その他どこにしようと、突然崩れるように倒されてしまった。これにより、コブその他の打撲傷が残った。

1842年7月末(26歳)(A+3年4ヶ月、Z-1年5ヶ月)

胸部の出血の始まり(「吸血鬼」(“Vampire”)のしわざ)。重篤な発作。

1842年8月26-27日(26歳)(A+3年5ヶ月、Z-1年4ヶ月)

デイトゥス・ハウスへの短期の帰還。雷鳴の夜に出血と発作。2回の自殺企図。胸部の出血と「吸血鬼」の出現の中断。それにかわって、呼吸障害・麻痺・皮膚の出血その他の症状が出現

1842年9月(26歳)(A+3年6ヶ月、Z-1年3ヶ月)

悪霊の出現、ゴットリービン殴打され打倒される。嘔吐

1842年9月14日頃(26歳)(A+3年6ヶ月、Z-1年3ヶ月)

魔術と憑依についてブルームハルト熟考し、祈祷と断食

1842年11月(27歳)(A+3年8ヶ月、Z-1年1ヶ月)

現象の持続、疼痛と嘔吐

1843年2月8日(27歳)(A+4年1ヶ月、Z-11ヶ月)

新しい展開。まず、砂とガラスの小さな破片を吐き出すことから始まった。次第に、あらゆる種類の鉄片が出てきた。まずそれは、曲がった古釘であった。ある時はそれが私の目の前で、長い嘔吐の末次々と計12本が前に差し出された洗面器の中に落ちてきた。さらに、形も大きさもさまざまな靴の留め金が出てきた。しばしばそれはとても大きかったので、どうやってそれらが喉を通して出てきたのか、ほとんど理解できなかった。

(中略)

あるとき彼女は激しい頭痛を訴えた。そこで私が彼女の頭に手を置くと、その至る所に白い点がほのかに光るのを見た。それは12本のピン針であって、半分ほどの深さで頭に突き刺さっていた。私はそれを1本1本引き抜いた。その都度、彼女はびくっと動いたので、痛みがわかった。そのほか私は、目からは2本、その後さらに4本のピン針を引き抜いた。

(中略)

編み棒が丸ごと、あるいは半分の長さのものが、彼女の上半身のあらゆる箇所から、さまざまな折りに頻繁に出てきた。その回数は、総計、少なくとも見積もっても30回をくだらなかつたと言える。それらはある時には斜めに、ある時は体に直角に出てきた。

後の場合には、しばしば、特にみぞおちから出てきた。しばしば、編み棒はもう半分まで出ているというのに、私はなお30分もかけて全力で引き抜かねばならなかった。

(中略)

これらの報告を信用しない人がいても、私は恨むわけには行かない。それらはあらゆる人間の思考と理解をはなはだしく越えているからである。私はこのようなことをほぼ丸一年にわたって観察し、体験した。その際には、いつも私には何人かの目撃証人がいた。よくない噂を防ぐために、証人を得ておこうと私は慎重に気をつけていたのである。そしてこうした観察と体験のために、私は出来事を大胆かつ率直に語ることができる。いかなる欺瞞・ペテンもなかったし、あり得なかつたと、私は完全に確信しているからである。

(中略)

なお、生き物も口から出てきたということとを述べておく。ただし、私自身はこれを見る機会を得なかつた。

(中略)

ある時訪問すると彼女は小さな部屋の中央に座り、たらいを前にしていた。その約半分までに、血と水が満ちていた。彼女の前も後ろも、部屋中血の海であった。彼女自身はすっかり血だるまになっていて、服はほとんど識別できなかつた。血は両耳から、両目から、鼻から、そして頭のとっぺんからさえ勢いよく流れ落ちていた。その後現象は鎮静化、「悪霊の声」、憑依はゴットリービンの体から遠ざかる。手編みを教えるようになる。

1843年夏(27歳)(A+4年7ヶ月、Z-4ヶ月頃)

デイトゥス・ハウスへ帰還

1843年11月末(28歳)(A+4年9ヶ月、Z-1ヶ月頃)

強い出血、失神

1843年12月24-28日(28歳)(A+3年10ヶ月、Z±0ヶ月)

病気の最後の日々。憑依は同胞のハンス・ヨルクとカタリーナ・デイトゥスへのりうつる。カタリーナは狂乱し、凶暴になって、やっとのことで押さえつけられるという具合であった。ブルームハルトによる描写。「彼女は私をずたずたにしてやると脅し、私は彼女に近づくこともできなかつた。彼女は自分の手で我が身を引き裂こうと絶えず試みた。あるいは、彼女を扱っていた人々に対して、何か恐ろしいことをしでかそう

とするかのように、狡賢そうにあたりを窺った。そのときの彼女は、罵りの言葉を語ったり、泣きわめいたりしたが、それはぞっとするような光景だったので、人々は彼女の内部に何千もの悪魔がひと固まりになって入っていると考えたほどである。ここで最も注目すべきことに、人々が彼女と語りあうことができたときには、彼女は完全に正気を保っていたということである。彼女はまた、人々にはっきりと注意を促しながら、自分はどうしてもあのような語り方、振る舞い方になってしまうので、自分を通して悪い事が生じないように、どうかしっかりと自分を押さえつけてほしいということができた。

(中略)

夜中の12時頃(27-28日)、カタリーナの喉から何度か、おそらく15分くらい続いたであろうか、絶望の叫びがとどろいた。それはものを揺るような大きな叫びだったので、家が崩壊するのではないかと思われた。これ以上恐ろしいものは、考えられない。カタリーナは激しく震えはじめた。あまりの激しさに、彼女の四肢がばらばらにもげてしまいそうであった。悪霊はただもっぱら絶望と不安に陥っているように見えたが、神に対する反抗も劣らず激しかった。その間にも、見えない世界の中で、彼の破壊が準備されていたようであった。ついに最も感動的な瞬間がやってきた。それは、その場において実際に目で見、耳で聞いた者でなければ、十分に想像することのできない瞬間であった。二時に、娘は頭と上半身を椅子の背にのけぞらせていたが、サタンの天使と称する者(“vornehmen Satanengel”)が、とても人間の喉から出るとは思えない声で、「イエスは勝利者だ(“Jesus ist Sieger”)!と吼えるように叫んだ。この言葉は、これを聞いたすべての人に理解され、忘れることのできない印象を与えた。いまや、悪霊の力と権力は、一瞬ごとに制圧されていくように思われた。悪霊は次第に静かにおとなしくなり、徐々にその動きが弱まって、ついには全く認められないほどに消え去ってしまった。それは、瀕死の者の命の灯火が消えて行くがごとくであった。しかし、それはようやく朝の8時のことであった。こうして、2年にわたる闘いは幕を閉じた。

3. 「戦い」の後

1843年12月28日以後

ゴットリービン、メットリンゲンの幼稚園職員となり、ブルームハルト家の構成員となる。以下ブルームハルト。「心が極度に消耗したために、カタリーナはしばらくはなお時たまけいれんを起こしたものの、じきに完全に回復した。なおしばらくは、いくつかが起こった。しかしそれらは、闇の力が以前の試みを改めてやろうとはしたものの、結局はおのずから失敗に帰する企てにすぎなかった。したがってまたしても私が必要とされるということもなかった。

(中略)

決着がついた後、こうしたことがあったものの、ゴットリービンは完全に健全さを取り戻した。医者にもわからなかった彼女の以前の(足や胃の)障害・疾患は、すっかりなくなった。彼女はあらゆる点で完全に回復し、まことに神の奇跡だとみることができる。彼女のキリスト教的精神は向上し、おとなしい謙譲の態度と、分別あるしっかりした語り方のために、そして決然さと慎みをも合わせ持っていたために、彼女は多くの人を助ける神の幸せな道具となった。また次の点には、彼女の性格の価値が最もよく現れている。つまり、彼女ほどの洞察力・愛・堅忍・思いやりをもって子供を扱うすべを心得ている婦人を、私はしらないということである。このゆえに、私は、手伝いが必要になったときには、私の子供たちを彼女に預けておくのが一番よかった。私は今、幼稚園を建てることになっているが、それを引き渡す人物として、彼女以上にふさわしい人物を見つけることができなかった。これ以降のゴットリービンについてのブルームハルトの次のような言葉を井上¹⁾は伝えている。「彼女は、その外的活動によって、すべての点で全体の中心であった。それは、あらゆる組織も計画も、ただ彼女の創作であったと言えるほどである。大小あらゆることで、彼女の注意深い目が見のがすようなものはなく、この施設の霊的な祝福に対しても、ゴットリービンの賜物は、重要な影響力を持っていた。……それで、私たちは、彼女を主からの特別な贈物以外のものとして見ることはできなかった」

1846年/1847年の冬(31歳/32歳)

ロイテスハイムでレギーネ・ヨルベルクによる幼稚園職員の講習に参加

1852年(37歳)

ブルームハルト一家とともにバート・ホルに移転。そこでゴットリービンは宿泊客

への世話係を担当。
 1854年9月25日（38歳）
 テオドル・ブローデルセンと婚約
 1855年1月9日（39歳）
 テオドル・ブローデルセンと結婚
 1856年（41歳）
 第1子クリストフ誕生
 1857年（42歳）
 第2子ハンス誕生
 1859年（44歳）
 第3子テオフィル誕生
 1862年（47歳）から
 生命にかかわるような重い病気にかかる。
 カンスタットの病院で胃の手術。
 1869年（54歳）
 “Morgenland”というバート・ボルの病棟
 の客室へ移る
 1872年1月26日（56歳）
 死去

【謝 辞】

北大における「戦い」の講義内容を教示下さり、また同文書の私訳の使用を許可下さった宇都宮輝夫教授（北大大学院）に感謝の意をささげたい。掲載させていただいた資料のプライオリティーは同教授にある。またドイツ語表現に関し教示して下さいった木村護郎教授（上智大学）、本論稿の作成にご協力下さった森口真衣准教授（日本医療大学）に感謝する。本論文の内容は第61回日本病跡学会（東京、2014年）にて発表した。



1.8 Möttingen (vor 1860)

図一 1860年頃のメットリンゲン

「戦い」 -メットリンゲンの悪魔憑き-		
ゴットリービン		ブルームハルト
1838年	(23歳) 母を失う	メットリンゲンの牧師に着任・結婚
1839年	(24歳) 父を失う	

1840年 2月	(24歳) 転居・異常出現 幽霊・けいれん	
1841年 8月	(25歳) 悪魔憑き	
1842年 4月	(26歳) 物音・幽霊の出現	ゴットリービンの異常を知る
6月	失神	牧会的対応の開始
7月	(26歳) 悪霊の声の出現 首の火傷・自傷行為・出血	悪霊の声との対決
9月		対策を熟考・祈祷・断食
1843年 2月	(27歳) 砂・ガラス片・古釘などの嘔吐 編み棒・ピンが身体から出る 激しい出血	
12月	(28歳) 悪魔は姉のカタリーナに乗り移り狂乱 「イエスは勝利者だ!」の言葉とともに終結	

1843年12月	(28歳) 回復 幼稚園勤務 ブルームハルト一家への手伝い	[地域・教会の信仰復興]
1844年		「報告書」提出
1852年	(37歳) パート・ボルに移住	[多くの病人の癒し]
1855年	(39歳) 結婚、その後3人挙児	
1872年 1月	(56歳) 死去	
1880年		死去 (74歳)

図-2 「戦い」の経過



図-3 ゴットリービン・ディトゥス（若い頃と思われる）



Gottlieb Dittus, Christoph Blumhardt (Sohn)

図-4 ゴットリービン・デイトゥス (中央)

(バート・ポール時代の中年以降であろう。左は父ブルームハルトの夫人、右は子ブルームハルト)



図-5 若き日のブルームハルト牧師



図-6 悪魔憑きのあった家

(筆者による撮影 (2013年8月)。現在は2階がブルームハルト資料室になっている)

図の出典

図-1・3・4・5:

Blumhardt-Gesellschaft Möttlingen e.V.:Johann Christoph Blumhardt. Ernst Franz-Verlag, Möttlingen. 2 Auf,1992より